

本年上半期における わが国の対東南ア貿易

東南アジアは、わが国の貿易において輸出で30%、輸入で17%(1962年)を占める有力市場であるが、本年上半期中(1～6月)のこの地域に対する輸出入の動向をみると次のような特色がみられる。

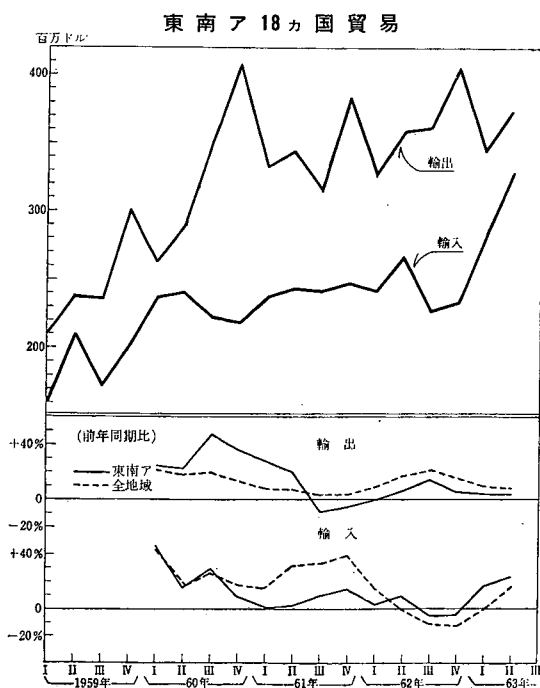
輸出は依然伸び悩み

まず輸出は、昨秋以降の伸び悩み状況を改めていない。すなわち、上半期中の東南ア18ヵ国(注)向け輸出額は717百万ドル(通関ベース)で、前年同期に比し4.7%の増加となっているが、その伸長率は昨年下半年の9.9%の半ば以下、また上半期中におけるわが国の総輸出の伸び率8.7%を大幅に下回っており対東南ア輸出が概して不振であったことを物語っている。

(注) ここで東南ア18ヵ国とは、琉球、韓国、台湾、香港、フィリピン、タイ、カンボジア、南ベトナム、インド(ゴアを含む)、セイロン、ビルマ、パキスタン、マラヤ、シンガポール、インドネシア、北ボルネオ、ブルネイ、サラワクをさす。

さらに輸出増加の相当部分が、商業ベースに基

(第1図)



づかない賠償、円借款などの増加(前年同期比13百万ドル増、ただし為替ベース)によるものである点を考慮すると、一般輸出の伸長はいっそう低調であったといえよう。

次に、主要輸出先別にみると、ビルマが賠償促進に伴う機械、金属の増加を中心に前年同期比71%の著増を示したのをはじめ、韓国が肥料、車両を中心に、香港が船舶、またインドが借款に伴う機械、金属を中心にそれぞれ好調を示した。これに対し、逆に減少した国は南ベトナム、セイロン、パキスタン、インドネシアなどで、とくに自動車の大幅減少を主因とした南ベトナムの不振が目立っている。

このように、本年上半期の対東南ア輸出が低調に推移した一般的背景としては、従来より①自国産業の育成に伴い、繊維(インド、パキスタン、韓国、香港)、医薬品(台湾)、合板(フィリピン)、ゴム(マラヤ)、肥料(台湾)などの分野において輸入代替産業が成長しつつあること、②西欧諸国、とくに西ドイツ、フランスが借款供与、見本市の開催、総代理店の設置などを通じ積極的に市場食い込み策をはかっていることなど輸出環境がいっそうきびしさを加えている点があげられよう。このほか、とくに本年にはいつてからは①東南ア諸国では外貨事情の悪化に対処して昨年末から本年にかけて輸入制限を一段と強化したため、フィリピン、セイロン、インドなど輸入の縮小した国が多かったこと、②バイアメリカン政策が強化された結果、たとえばAID資金の自国調達割合が上昇しており(1961年度44%、62年度63%、本年1～3月77%)、南ベトナムの自動車などに大きくその影響が現われていること、③中共の綿布輸出が、生産の回復と中ソ関係の悪化を反映して再び東南ア、とくにビルマ、セイロン、インドネシアに集中しはじめ、しかも価格、品質などの面で国際競争力を獲得しつつあること、など新たな事情が輸出を阻害する要因となっていることも見のがせない。

しかしながら、東南ア各国の外貨事情は砂糖、

対 東 南 ア 貿 易

(単位・百万ドル)

輸 出		1963年 1～6月	前 年 同 期 比									輸 入	1963年 1～6月	前 年 同 月 比									
			増	減	増	減	商 品 別 内 訳							増	減	増	減	商 品 別 内 訳					
							(Δ)率	(Δ)額	繊維	化学	金属							機械 /船舶を除く	船舶	その他	(Δ)率	(Δ)額	食料
増 加 し た 国	琉 球	63	5.5	4	2	1	0△	1	1	1	琉 球	50	68.0	20	20	0	0	0	0	0	0		
	韓 国	89	55.7	32	0	13	7	12	0	0	韓 国	57	31.1	13	12	0	0	0	0	1	0		
	香 港	114	26.8	24	3	3	3	2	12	1	香 港	13	30.0	3	1	0	0	0	0	0	2		
	マ イ	81	14.2	10△	1	2	4	4	0	1	南ベトナム	3	47.6	1	0	0	0	0	0	0	1		
	マ ラ ヤ	21	23.3	4	0	0	2	1	0	1	カンボジア	2	100.0	1	0	0	0	0	0	1	0		
	シンガポール	50	7.2	3	0	0	0	1	0	0	タ イ	54	38.0	15	16△	1△	1	1	0	0	0		
	ビ ル マ	36	70.7	15	0	0	3	8	3	1	シンガポール	13	0	0	0	0	0	0	0	0	0		
	イ ン ド	75	29.3	17	0	5	0	9	4△	1	フィリピン	109	24.2	21	2	1△	3	0	19	2	0		
	英領ボルネオ	3	70.5	1	0	0	0	0	0	0	ビ ル マ	13	41.5	4	3	1	0	0	0	0	2		
	台 湾	48	17.4△	11	0△	4△	2	0△	4△	1	イ ン ド	79	17.9	12	5	2	3	0	0	2	0		
減 少 し た 国	南ベトナム	15	54.0△	17△	2	0△	3△	10	0△	2	インドネシア	51	13.2	6	1	0	0△	1	0	6	0		
	カンボジア	5	20.3△	1△	1	0	1△	1	0	2	パキスタン	30	129.3	17	0	17	0	0	0	0	0		
	フィリピン	58	5.6△	3	4△	2	2△	6△	4	3	セ イ ロ ン	5	25.0	2△	1	0	0△	1	0	4	0		
	インドネシア	31	47.7△	28△	1△	4△	7△	15	1△	2	韓 国	11	10.5△	1△	1	0	1	0	0△	1	0		
	パキスタン	20	32.8△	9△	1△	4	1△	7	0	2	マ ラ ヤ	86	10.6△	10	0	0	0△	8	0△	2	0		
	セ イ ロ ン	8	51.1△	9△	6	0	0△	1	0	2	英領ボルネオ	33	6.0△	2	0	0△	1△	1	1△	1	0		
合 計		717	4.7	32△	3	10	10△	5	13	7	合 計	609	20.1	102	58	20△	1△	10	21	14	14		

コプラなど一部1次産品の市況の堅調、外国援助の流入、輸入制限の強化などを反映して、インドネシア、韓国など一部の国を除きこのところ久方ぶりに改善をみせ、主要10か国の外貨は本年にはいつてから最近までに215百万ドルの増加をみている。さらに、わが国の借款供与は最近増加傾向にあること、ビルマ向け米綿委託加工輸出も新たに加わることなど、わが国の輸出環境はいくぶんなりとも好転のきざしがみられる。現に、7～9月期における東南アの輸出信用状接受高は前年同期比20%増(本年1～6月期、同11%増)と輸出の好転を裏書きしている。

輸入は増勢顕著

一方、上半期の輸入は第1図に示すように、昨年下半年の減少から急増に転じている。すなわち、輸入額は609百万ドルと前年同期比20.1%の上伸を示し、昨年下半年(前年同期比6.0%減)とは様変わり状況を示しているばかりではなく、同期中のわが国総輸入額の増加率(前年同期比7.5%)をも大きく上回っている。

このように輸入が急増するに至ったのは、もちろんわが国の景気上昇に伴う需要の増大によるところが大きい

が、このほか①砂糖の市況高騰とそれに基づく緊急輸入対策の実施により、域内諸国からの大量買付けが行なわれたこと、②とうもろこしのように開発輸入が進捗したことなどの要因が働いている点が特色としてあげられよう。

したがって、輸入先別にみても、パキスタンが綿花を主体に前年同期に比し2倍以上の著増をみただのはじめ、砂糖輸入の増加を主因とする琉球(同、68.0%増)、台湾(31.1%増)、木材を主とするフィリピン(24.2%増)、とうもろこしによるタイ(38.0%増)など軒並み増加をみせており、減少したのは生ゴムの不振を反映するマラヤ、あるいは韓国、英領ボルネオなど一部にとどまっている。

砂糖など一部輸入品の市況が依然堅調に推移していることや、わが国の景気動向などを考えあわせると、東南ア地域からの輸入は、当分現在程度の高水準を持続するものとみられる。

最近の東西貿易の動向

ソ連が9月中旬、カナダ・豪州などから大量の